

日本キリスト教協議会第 41 回総会期活動方針

主題「一神の与えてくださるすべての命を愛する者として」

聖句「すべての人に命と息と万物とを与えてくださるのは、この神だからです。」

(使徒言行録 17:25b、聖書協会共同訳)

はじめに

エキュメニカル共同体である日本キリスト教協議会(NCC)は、世界教会協議会(WCC)第 11 回総会テーマである「キリストの愛が世界を和解と一致へと動かす」に連なり、日本社会をはじめ世界の様々な課題を、「すべての命を愛する者」が集まる教会の宣教課題として捉え、共に手を携えて歩んでいます。それは、私たちが不完全な者であるがゆえに犯してきた様々な過ちを悔い改め、社会の様々な不正義や人権侵害に抗い、神の被造物全てを愛しみ、仕えるという責任を果たしながら和解と平和を求めるキリスト者の集まりだからです。また最近では、新型コロナウイルス感染症の経験によって教会のあり方、思考や行動様式の転換が問われる経験をしてきました。

私たちは、キリストが身をもって示してくださったすべての命とともに生きる道を目指して歩み、立場の違いを尊重し合い、謙虚にそしてあつく主のみ言葉に耳を傾け、その働きに共に参加する NCC であり続けたいと願います。

A 宣教(ケリュグマ)

<活動指針>

グローバル資本主義に突き動かされ、限りなく利便性と快適さ、そして飽くなき利益を追求してきた世界は、生態系や自然環境などの破壊を引き起こし、神の創造の摂理からの乖離の溝を深めつつあります。また、新型コロナウイルス感染拡大の危機の中で感染予防のために求められる身体的距離の問題にとどまらず、閉鎖性や排他性によって社会と世界が分断に傷つき、孤独と相互不信、そして差別に傷つけられています。

今こそキリストの愛に根差す和解と一致によって、すべてのいのちを共に生かし合う持続可能な地平に向かう癒しと再生への道が求められています。世に遣わされた教会(エクレシア)が自らの宣教的立ち位置と存在理由を明確にし、また危機にある世界における宣教について新たに理解する道を、私たちは模索しなければなりません。その視点に立ちながら、私たちはキリストの教会として遣わされた世界(オイクメネ)についての洞察と捉え直しが求められます。教会の遣わされる世界が今、どのように取り返しがつかないほどゆがめられ、いのちがどのように傷つき、魂がうめいているか、教会がそれらに気付く前からその現場において主イエス・キリストが憐れまれ、苦しめられている(マタイ 25:35-36)ことを抜本的に問い直し、その地平から福音に傾聴し宣教を刷新することが今の教会に求められています。そのことは、私たち NCC が大切にする“エキュメニカル”の意味の問い直しにもつながるのです。

<活動課題>

- ・ コロナ危機、またポスト・コロナ危機の世界についての神学・宣教論的考察を深め、分かち合うプログラムを推進する
- ・ 上記のプロジェクトを推進するために、共通の主題のもと各委員会共同プログラムの企画を模索する
- ・ アジア・キリスト教議会(CCA)や WCC が、このテーマとどのように取り組んでいるか追跡・調査する

B 奉仕(ディアコニア)

<活動指針>

エキュメニカルな宣教において教会が世界(オイクメネ)という領域を理解するのは、教会が福音の証人として遣わされる「地の果て」(使徒言行録1:8)を自覚するからです。そして、そこで私たちは福音の証人として愛の「奉仕」(ディアコニア)へと主イエス・キリストによって促されます。“オイクメネ”(ルカ 2:1)の「地の果て」(ルカ 2:7)とは、いのち、人権、正義、そして平和が差別的排除、貧困、そして抑圧によって危機に瀕している現場と言えます。コロナ危機を通してこの世界に既に深く内在し、浸潤していた矛盾がより鮮明に露呈し、深刻化していることに気づきました。貧困の拡大、差別の増大、民主主義制度の機能不全、国際平和の崩壊、そして生態系破壊と異常気候変動に連結した自然災害と有害ウイルス感染の現実直面し、私たちの世界は混迷しています。NCC は、この混迷する世界にあって、キリストの福音に立つ隣人愛に促され、癒し、修復、和解、そして平和への一致を目指して、主がすでに待っておられる「地の果て」に遣わされて担うべき奉仕の道について模索することが新たに求められています。

<活動課題>

- ・ 上記のテーマを、NCC 各委員会がどのように理解し、また新たに奉仕に臨もうとしているかについて議論を呼びかけ、課題の明確化を促す
- ・ 各委員会相互の新たな「奉仕」課題についての理解を分かち合い、相互の啓発と協力を促す
- ・ NCC 加盟教団・団体の宣教現場において既に取り組まれている奉仕の働きについて共有し、相互に協力できる態勢を整える

C 証し(マルトウリア)

<活動指針>

キリスト教会が遣わされる世にあって求められる「証し」とは、イエス・キリストとその福音以外の何ものでもありません。自分のいのちが脅かされることを省みず、永遠のいのちを指し示し約束するイエス・キリストの福音における“然り”と“否”とを、世の権勢を恐れることも媚びることもなく証言することを、キリスト者の証しは内包します。すなわち、教会が遣わされる世にあって、力ある者の不義に目を閉ざさず、弱いいのちが脅かされ、傷つけられる不条理を正当化するために動員されるあらゆる偶像化、神格化、そして偶像的圧力(「習俗と伝統」として正当化されたことへの社会・政治的同調圧力に至るまで)に対して否の証しを預言者的信仰に立ち担うことが求められています。教会が遣わされた地の果てにおける奉仕の現場には、必ずそこにキリスト者の証しが求められ、そしてその証しはそこですでに働かれるキリストと、そこで慰めと助けを待ちわびていたいのちに聞かれるのです。

<活動課題>

- ・ NCC、あるいはNCCの各委員会が出す声明文などが積極的に加盟教団・団体に伝達される方法を構築する
- ・ 宣教と奉仕の現場において課題に取り組むNCC各委員会の貴重な証しをNCCの加盟教団・団体に伝達し、共有するためのコミュニケーション機能の充実を図る
- ・ NCC加盟教団・団体の宣教と奉仕の現場においてなされる証しがNCCにおいてエキュメニカルに共有されるプログラムを企画する

D 礼拝(レイトゥルギア)

<活動指針>

NCCはこれまで加盟教団の歴史と神学に基づき営まれる礼拝を、エキュメニカルな立場から相互に尊重し、その多様性を豊かな賜物として理解してきました。しかし、2019年7月のNCC主催・宣教会議

において、教会の歴史と伝統的神学に基づく礼拝において、誰が招かれずにいたかについて反省が促され、礼拝におけるキリストの愛の「交わり」(コイノニア)から疎外されたいのちについて問い直すことが求められました。それは、この傷ついた世界にあって、礼拝がキリストの愛によって癒され回復され、和解による平和と一致が実現する時間と空間として刷新されるという課題です。格差と差別の深刻化する世界において、礼拝と祈りの霊性を保全しようとする教会が「門の外で」(ヘブライ 13:12)苦しむいのちの叫びに対して共感する感性が衰弱し、無関心となり、むしろ閉鎖的になりかねないことに私たちは注意を払う必要があります。

さらに、これまで呼び集められ、集い、接し、「キリストの体」として交わることを大切にしてきた教会が、この度のコロナ危機を通して、互いに身体的距離をとることが求められています。教会の従来礼拝と集会にも変更を余儀なくされ、大きな影響を及ぼすことになりました。すなわち、礼拝と祈りにおける明け渡してはならない連続と、避けがたい非連続、そしてそこから導かれ目覚める霊性の刷新について、私たちは今こそ考察を深めなければなりません。なぜならこの問題は、私たちの信仰生活の在り方に重大なかわりを持つ問題であるからです。私たちは、共にこの問題について問いを明らかにし、応答する議論を交わし、互いに学び合わなければなりません。

<活動課題>

- ・ 宣教と奉仕の現場において教会がこれまで「疎外してきたいのち」について検証する
- ・ 感染予防上、身体的距離をとることを求められているが、そのことが礼拝・集会の在り方に、オンライン化をはじめ、どのような影響を及ぼし、またそれが持続していくのかについて宣教の問題と併せて問い直され、相互に学び合う場を確保する

むすびーいのちの和解をめざす新たな「交わり」(コイノニア)を求めてー

社会における信頼のきずなという関係性の中で生きる人間のいのちは、コロナ危機において激変する世界の中で生存の深刻な危機に直面し、その危機の深化を加速させつつあります。そして、その危機はこれまで私たちが当然(確実)と考えてきたことをさらに不確実の闇の中に引き込もうとしています。私たちは、今ここで何が問われているのか、福音に深く聞き直し、教会の遣わされた世界の中で応答しなければなりません。

激変する世界(オイクメネ)にあって社会のかたちが格差や差別によって大きくゆがめられています。その中で、キリストが呼び集められる「交わり」(コイノニア)について、私たちは、この危機の時代にこそ後退することなく、ジェンダーやセクシュアリティにおける正義、そして真実のパートナー性と多様性を問い直し、それを与えられた恵みの豊かさを感謝し具現していく道へと踏み出さなければなりません。

WCC は、2013 年の第 10 回総会(韓国 釜山)以来、「正義と平和への巡礼 “Pilgrimage for Justice and Peace”」プロジェクトを繰り広げてきました。それは、歴史的に受け継がれた既存の「私たちの」教会から、いのちのきずなを信頼して、平和が崩壊する世界に踏み出していくことです。また、傷ついたこの世界のただ中で、キリストにあって神が教会に先駆けてすでに成し遂げつつある出来事に巡礼者としてのキリスト者が聖霊に導かれて遭遇することであり、主イエス・キリストが招き入れてくださる共に生きるいのちの「交わり」に私たちがあずかる旅です。

混迷を深めるこの世界にあって、「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣く」(ローマ 12:15)「交わり」へと教会が刷新されることが求められています。今、貧困と差別に寸断される世界の荒れ野で呻き苦しむいのちに寄り添い、そこで祈りを紡ぎ、「すべての命を愛する者」として共に生きる交わりへと招かれています。NCC は今、新たに呼び集められ、ここからこの嵐の海を、「向こう岸に渡ろう」(マルコ 4:35)と招かれる主(詩編 107:28-30)に従い、漕ぎ出していきましょう。